宮古の説話と世界像
～「旧記類」の神話を中心に～

宮川　耕次（宮古島市史編さん委員）

1. はじめに

宮古にはじつに多様な説話があり、この豊富な説話の風土をひも解いていくことはとても重要なことである。

今回、説話とりわけ神話を中心に考えていきたいが、それには理由がある。まず説話というのがどういうものであり、そのことがどのような意味をもっているか、という問いかけをしたいからである。

これまで説話と言えば、明確な定義もされず、どちらかというと「未開の人々の話」「非合理的で信頼できない」などで軽く扱われてきた面がある。あるいは研究においても史実の解明のための資料などと一面的に捉えられてきた所がある。

しかし、今説話の研究が人文科学の中で占める役割が大きくなったと言われる。『神話学講義』(注1) という著書の中で、松村一男は次のように述べる。

> 現代の人文科学は、西洋ばかりでなく地球上の他地域も対象としているし、また偉大な個人ばかりでなく一般の人々にも焦点を当て、その中で制度や機構といった「表層」よりも、文化の背後にあって文化を規定している思考法や世界観と言った「深層」部分により関心を示している。そうした流れの中で、特に、伝統社会や古代の社会の精神文化を解明する手掛かりとして、神話は従来にもまして重要視されてきている。

さらに松村は、19 世紀型と 20 世紀型の神話学のパラダイム（その時代に特徴的な科学的認識方法のシステム）の特徴を、次のように述べている。

(1) 19 世紀型神話学は、ダーウィンの進化論と歴史学をパラダイムとして形成され、神話は人類進化の特定の時期の産物、過去の遺物と考えた。
(2) 20 世紀型神話学は、普遍的な心のメカニズム、無意識をパラダイムとし、神話を人類の普遍的な無意識的な心の働きの産物、と考えた。

やや難解な表現の引用になってしまったが、松村はさらに次のように指摘する。

> 肝心なことは、「無意識」の存在の認識である。(中略)精神分析学者・ジグムント・フロイト（1856－1939）は、『夢解釈』（1900）などの著作で、人間文化における隠された

体系、つまり『無意識』として定式化し、（中略）合理的、理性的に説明できる、と説いた。

大林太良は、20世紀後半の現代神話学の先駆的な役割を果たしてきたが、沖縄の本土復帰前から奄美をはじめ琉球神話の研究も進めており、沖縄における神話研究の遅れも、早くから指摘してきた。

宮古においては、古来より多くの神話が伝承され、宮古の旧記類をはじめ慶世村恒任、稲村賢敷、ニコライ・ネフスキー（ロシア）など宮古研究の先駆者たちによる、採集・分析などがなされてきた。ネフスキーは、1920年代に全国的な研究雑誌『民族』に宮古の神話などを紹介している。

復帰後、宮古においては福田晃や谷川健一（民俗）、遠藤庄治をはじめ宮古民話の会の佐渡山安公や下地利幸たちが、民話（昔話）を中心に採集研究が進められてきた。

今回、この尨大な説話を一挙に取り上げるのは困難であるため、先史・古代から現代の本土復帰までを区切として、宮古の「旧記類」を中心に、そして説話の中でも神話を軸に資料の紹介および研究考察することにした。

なお、「旧記類」とは、『御嶽由来記』（1705～1707年）、『雍正旧記』(1727年)、『宮古島記事』(1752年)、『宮古島記事仕次』(1748年)を指すことにする。これらは琉球王府の求めに作成された報告書の写しである。（なお、『宮古島記事仕次』は私家本であったが、王府に届けられたかどうかは、はっきりしない。）

2. 神話・伝説・昔話の定義

本論に入る前に、説話の具体的な中身である神話・伝説・昔話について、定義しておきたい。今回はそのうちの神話を中心に取り上げていく。

(1) 神話とは何か

『世界神話辞典』(注2) から抜粋する。（番号は筆者）

①神話とは、原古つまり世界のはじめの時代における一回的な出来事を語った物語で、その内容を伝承者は真実であると信じている。

②したがって神話は聖なる物語である。

③神話は存在するものを単に説明するばかりでなく、その存在理由を基礎づけるものであり、原古における神話的な出来事は、のちの人間が従い守るべき範型を提出している。

④また神話には人類の思考の無意識の構造が基礎にある。

⑤神話は神話的出来事の反復としての儀礼とともに、それを伝承する民族の世界像の表現である。（中略）

⑥神話には、世界・人類・文化などの起源を語る創世神話と、神々と英雄の波瀾に富む生涯を語る神々の神話ないし英雄神話に分けられる。

⑦神話は伝説や昔話とは別のジャンルであるが、モチーフや話型においては共通していることも少なくない。

以上が、神話の定義および基本的性格である。

難解ともとれる神話の定義であるが、これを別の方法でアプローチすると、次の3つの要素にまとめられる。大林太良は、次のように示す。

1、誰が、どのようにして世界を創造したか？
（宇宙起源論）

2、誰が、どのようにして人類を創造したか？
（人類起源論）

3、誰が、どのようにして文化を創造したか？（注3）

神話の定義をわかり易くするため、宮古の神話に出てくる「大城御嶽の由来」（別紙）を例にとって、項目に沿って詳しく見てみたい。

この神話には、次の3つほどの話の束から構成されている。

a. 女神の豊見赤星てだなうら真主が、島尻の当原に天下りし、水を求めて西方へいき狩俣の大城山に住むようになった。

b. ある夜若者の夢を見て妊娠し、7ヶ月めに2人の男女の子を産み初めて会う人を父にしようと家を出たら、大蛇がいて喜びの情を示したので、若者が蛇の化身であることを知る。

c. これから狩俣村は始まり、氏神として崇拝し、祖神祭を行っている。

先の「神話とは何か」の中で示した、①の原古とは、a. の「女神が天下りし大城山に住んだこと」、b. の「大蛇の子を産むということ」を示すと同時にそのことが②の「神聖な物語」となる。③の「その存在を基礎づける」とは、c. の「狩俣村がこうして開始され、女神を始祖として現在まで繁栄を見せていること」の起源となった、ということを表している。村の人びとのアイデンティティとも言える。

④「思考の無意識」とは、「意識」に対比して使用されており、私たちが目ざめている白昼の行動などに考える思考が「意識」なのに対し、夢などの眠っている時などの思考を「無意識」という。また、「7ヶ月」で子を産むという表現も、無意識的（日常的ではない）な表現だが、これは誤りというわけではない。神話的な思考は、私達の通常の意識を惑わすような表現ではあるが、先に『20世紀神話学のパラダイム』で述べたのは、そのように人間を外部（自然や社会からのように）からのみ捉えるのではなく人間の精神、その内部にも発見すべきことがある、ということである。フロイトの「無意識」の発見は、これまで「意識」のみが人間の精神の基本であったが「意識」は「無意識」という広大な領域の一部という認識であり、意識は無意識によって規制されている、ということである。

⑤の「儀礼」とは、祖神祭などの祭祀行事を指しており、そこで神話の内容が年々反復して披露され、村の人びとがこれを世界観として再認識する。

ここで、伝説・昔話についても前掲辞典より定義する。

（別紙）

大城御嶽

祭神は女神豊見赤星てだなうら真主と唱え船路守護並に諸願につき狩俣村中崇敬す。
由来、昔神代に右神始めて狩俣村の東にある島尻当原という小森に天降り、それから水を求めて西方に行き大城山に居住したと伝えている、彼女或る夜若男に取合った夢を見て俄に懐胎し七ヶ月目に一腹の男女を生んだ、父なき子なれば初めて見る者を父にせんと定めて家を出た所、山の前にある岩に大蛇はいかゝり、彼の子を見て首を上げ尾を振って喜びの情を示す、これに依り最前の男は大蛇の変化であったことを知ったと言い伝えている、これから狩俣村は立始ったので氏神として崇敬しうやがむの祭を行っている。

『御嶽由来記』

(2) 伝説とは何か

伝説は、創造性ないし形成的な原古に起こったことを述べるのではなく、原古と現在との間にある中間の時代に、実在したと信じられる固有名詞をもった特定の人物が、特定の具体的な場所で行った出来事を語り伝える説話である。

(3) 昔話とは何か

昔話は、出来事は〈むかしむかし〉と漠然として起きたことであり、かつ1回的というよりも、少なくとも昔話の世界では何回も繰り返し起こりうるような典型的な出来事である。

ここで定義したのは理念的なものであり、それはケースバイケースで分類の判断がなされる必要があるため、表1に沿って再度見ていきたい。

まず、神話・伝説・昔話の順に、左欄に掲げた1つひとつを対応させると特徴が出てくる。「真偽」とは、その話を信じているか、と問われれば、例えば先の狩俣村の大城御嶽の由来を信じているから祖神祭も延々と続けてきたのである。それで、神話と判断したのである。

次に「時間」を適用してみると、大城御嶽の場合、原古、「すなわち世界の完成以前の太古」として、合致する。「場所」は、「完成以前の世界」として、狩俣島尻の当原に天下りしそこから良い水求めて西へ移動して大城山に辿りついたその世界を指す。「性格」は、神聖かどうかの判断は神の天下りなどのような人間を超えた存在を言っている。「主人公」は神か人間かというものだが「性格」とも類似をなす。

このように1つひとつの要素を適用させて判断していく。だが現実には理論通り割り切れない部分も多く、総合的な判断が求められる。

表1　神話・伝説・昔話の特徴

	神　話	伝　説	昔　話
真　偽	真実	事実	虚偽
時　間	世界の完成以前の太古	歴史上のある時	無時間
場　所	完成以前の世界	現在と同じ世界	不定
性　格	神聖	神聖または世俗的	世俗的
主人公	人間以前（主として神々）	人間	人間または人間以外（妖精など）

『神話学とは何か』吉田敦彦・松村一男（有斐閣新書、13頁、1987年）

3. 説話群の概要

宮古に古来から伝承されている説話群は、数多いが、それらの中から「旧記類」および、宮古の研究者による採集などを合わせて62話ほどを拾い集めた。（表2、表3）

その内訳は、『御嶽由来記』12話、『雍正旧記』16話、『宮古島記事』3話、『宮古島記事仕次』3話、『宮古史伝』6話、『宮古島庶民史』12話、ネフスキー関連9話、岡本恵昭関連1話となっている。

また、神話・伝説・昔話の別では、神話17話、伝説40話、昔話5話となっている。

ここに記載した説話群は、現在の所仮説的なものとして位置づけている。とくに史実のような言い伝えなどはかなり多く、それと伝説との区別をどのようにするのか、試行錯誤の状況にある。

また、神話と思われるものの、記録が単なる概略だけのものはカットした。

何よりも、これらの説話群は基本的に無文字社会で生み出されたもので、「旧記類」に収められていない部分もかなりあったが、そのまま拾われず埋もれた伝承も多かったと思われる。その結果、蔵元という行政機関のチェックを経て記録され残ったものを、現在私たちは目にしている。

これらの説話を「民間説話」と「琉球王朝神話」などと区別して使用しているが、一応「旧記類」の多くは行政機関のチェックという意味で王朝神話的な性格を少なからずもっていると考える。

しかし、王朝神話には一定の規制や制限があるのも事実だが、それは致し方ないことであり、一定の制限の中でも本質的な部分は必ず残っているはずである。

さて、表2・表3の説話群に戻ると、圧倒的に伝説が多いことがわかる。とはいえ、神話の数も実に多く、多様であることがうなずける。

昔話については、ここではネフスキーが収集したもののみを掲げているが、旧記類が中心であるため今回はわずかに止まった。ただそれゆえ昔話が乏しいわけではない。昔話は復帰後、宮古内外で活発な採集・研究が展開されているものの、今回は本土復帰までと取りあげる時期を限定しており、別の機会でとりあげる必要があろう。

表２　旧記類の説話（神話・伝説）抄

	名　称	場　所	分　類	概　要
御嶽由来記(1705 年)				宮古島旧記並史歌集解　稲村賢敷　1977 年
1	島始	下里	神話	クイツヌ、クイタマ原夫婦神天下り
2	漲水御嶽弁財天女	下里	神話	人蛇婚伝説
3	大城御嶽由来	狩俣	神話	人蛇婚伝説、祖神ニーリ
4	中間御嶽由来	狩俣	伝説	うたきの石を船の守護神に
5	船立御嶽由来	西仲宗根	伝説	鍛冶伝来、久米島から兄妹漂着
6	山立御嶽由来	友利	伝説	天女伝説
7	池ノ御嶽由来	与那覇	伝説	船守りの神
8	嶺間御嶽由来	友利	神話	あまり村建て、犬祖伝説（口碑）
9	喜佐真御嶽由来	川満	伝説	天女伝説、若按司と宝玉
10	比屋地御嶽由来①	伊良部	伝説	豊見氏親のサメ退治伝説（昔話「太陽の子」あり）
11	新城御嶽	狩俣	伝説	すみ屋から狩俣へ白鳥が舞う。船守の神
12	ンナフカ祭	荷川取・宮国	神話	竜宮伝説と大世の話
雍正旧記(1727 年)				宮古島旧記並史歌集解　稲村賢敷　1977 年
13	尻間御嶽由来①	下里	伝説	少女昇天伝説、継子いじめ
14	尻間御嶽由来②	下里	伝説	のきなは先祖祭、仏教行事
15	外間御嶽由来	東仲宗根	伝説	根間イカリのコネイリ祭り
16	鱶を食わないこと～仲宗根家の子孫	西銘	伝説	姥捨て山伝説、フカに助けられたこと
17	赤子に鍋墨をつけること	野崎	伝説	寄木の伝説、運命の印
18	目利真御嶽由来	川満	伝説	天女伝説
19	浦島兼久の仇討ち	川満	伝説	父の仇討ち
20	上比屋御嶽の由来	砂川	伝説	天女伝説　津波よけ伝授
21	長山御嶽由来	伊良部	伝説	鉄の伝来とヤマト人渡来
22	比屋地御嶽由来②	伊良部	伝説	久米島から兄弟神渡来
23	通り池伝説	下地島	伝説	継子いじめ
24	とさの貞操を守ったこと	伊良部	伝説	夫の約束をアーグで守る
25	運城・泊御嶽由来	仲筋	伝説	島守り神、船路守の神が天下り
26	塩川御嶽由来	塩川	伝説	2 つの巨石が飛来
27	神名遊び	仲筋	伝説	嶺間按司が伝えた神名祭
28	鷹の墓所	水納	伝説	百合若伝説
宮古島記事（1752 年）				宮古島旧記並史歌集解　稲村賢敷　1977 年
29	来間島立始りの由来	来間	神話	兄妹始祖、戦乱の世
30	こまらはい霊術のこと	狩俣	伝説	呪術伝説
31	多良間島立始めし事	多良間	神話	兄妹始祖、津波

	名　称	場　所	分類	概　要
宮古島記事仕次(1748年)				宮古島旧記並史歌集解　稲村賢敷　1977年
32	野崎マサリヤが南風の島より帰りし事	野崎	伝説	南の島あろう島で人食い人種より逃れる
33	ヨナイタマ伝説	下地島	伝説	人魚伝説と津波
34	久葉嘉按司が女子・好善のこと	嘉手刈	伝説	津波と夜占い
		慶世村・稲村らの採集説話		
宮古史伝(1927年)				2008年　冨山房インターナショナル
35	盛加神	東仲宗根	神話	英雄神の伝説
36	大主御嶽由来	池間	神話	卵生伝説、創生神話
37	住屋御嶽由来	下里	神話	継子いじめ伝説、根入りやの国から帰還
38	マムヤ伝説	平安名	伝説	野城按司とマムヤの恋
39	八重干瀬伝説	池間	伝説	姉弟神
40	尻間ミガガマ	下里	伝説	天女伝説　権現堂
宮古島庶民史(1957年)				1972年　三一書房
41	池間のまつさび	池間	神話	おもと御嶽大神の恋
42	女護ヶ島の話	友利	神話	女たちと赤牛　　カタイラマーガ伝説
43	平家(落武者)伝説	狩俣	伝説	仲間御嶽
44	大城御嶽の由来	狩俣	神話	島始神歌　人蛇婚伝説
45	やーますふなかの由来	来間	神話	島始神歌　まつりを怠った罰
46	倭人漂流伝説	仲筋	伝説	カンカカリャが蘇生させた
47	唐人渡来伝説	大浦	伝説	戦乱で漂着
48	くーるく	多良間	伝説	少女昇天
49	あーりゃうの島	砂川	伝説	交易とその決裂
50	おうがまの霊石	砂川	神話	流れ島
51	七人兄弟の唐人渡来	野崎	伝説	大泊に漂着、各御嶽に祭られている
52	高麗人漂着	野崎	伝説	打網を贈与
宮古のフォークロア・月と不死　　ネフスキーの採集説話(1922、26、28年)				1998年　砂子屋書房、1971年　平凡社
53	盲たち		昔話	象に会うが、部分しか認識できない
54	一寸法師		昔話	茶碗を舟に箸をさおに
55	ンタバル・トゥユミャ	仲筋	伝説	賢者の話
56	悪魔		昔話	坊さんの教えを守らず悪魔に追われる話
57	金持ちと貧乏人		昔話	神の試した人間の心
58	大洪水		昔話	蛇と脱皮
59	太陽と月の話	多良間	神話	夫婦だった太陽と月
60	アカリャニザガマの話②		神話	慶世村および多良間の人から採集
61	美人が生まれぬわけ		伝説	未婚の女性が妻子ある男性と恋に落ちる
		岡本恵昭の採集説話　宮古島の信仰と祭祀		2011年　第一書房
62	万古山御嶽道明け縁起	荷川取(下崎)	神話	1930年、神主与那覇メガさんによる宮古島創生神話

表 3　「旧記類」を中心とした説話群の内訳

	御嶽由来記	雍正旧記	宮古島記事	宮古島記事仕次	宮古史伝	宮古島庶民史	宮古のフォークロア	岡本	計
神話	5	0	2	0	3	4	2	1	17
伝説	7	16	1	3	3	8	2	0	40
昔話	0	0	0	0	0	0	5	0	5
計	12	16	3	3	6	12	9	1	62

4.『遺老説伝』と宮古の説話

宮古の「旧記類」は、琉球王府の修史（歴史）編さんの史料として報告されたものであった。

『御嶽由来記』（1705～1707 年）は、原則『琉球国由来記』、『雍正日記』は『琉球国旧記』編さんのための資料であり、文書で要求されたものへの報告と言われている。ところが、1745 年に刊行された『球陽』の外巻として発行された『遺老説伝』には、『御嶽由来記』や『雍正旧記』に盛り込まれた内容のものが、多く収録されている。

『遺老説伝』は、説話集として発行されたが、沖縄、宮古、八重山合計 141 話中、25 話が宮古の説話で占めている。（表 4）

さらに、1935 年に島袋盛敏による訳本の刊行に際して、その序文に柳田国男と伊波普猷が寄稿しており、その一部を紹介したい。

柳田―伊波氏の『古琉球』によって南島の学問に目を開いた私は、さらに遺老説伝によって沖縄が好きになった。是等の昔話の大半が、更に南の小島の宮古島で採集せられている。（中略）又 1 つの伝承の様式に、宮古だけは著しい特色があった（中略）島の口碑は悉くアヤゴと称する律語によって暗踊されていた。そうして多くの昔話までが、ここではアヤゴになって伝わったらしいのである。

「民族」という雑誌には、ニコライ・ネフスキー君の最近の採集があり、新たに作られたアヤゴも載っているが、是と昔話との関係はまだ精確には知られていない。

伊波―遺老説伝には宮古島の伝説が割合に多く収録されているが、宮古島旧記を見ると、それ等の伝説が一層詳しく記載されていて、これが材料になったであろうことがわかる。当時宮古には特に文筆の士が多かったことがわかると同時に、又他の地方の伝説についてもどうして遺老伝説に収録されたかを推することができる。

宮古島の伝説が比較的多く採録されているのは、同島にはもと日本上古の「かたりべ」のような者がいた。仲宗根豊見親の八重山征伐をうたった 5、60 行の史詩をはじめ、幾多の伝説がアヤゴという律語や又は物語として語られていたが、これ等がこの旧記に初めて採録された。

これらの序文の一部から、柳田がこの説話集をこよなく愛し、宮古では昔話をアヤグによって暗誦していたと語る。さらに伊波は、宮古には「かたりべ」の役がいたり、文筆の士が多かったと述べている。これらのことから、宮古が説話などを語る環境が、豊かであることがよく知られていたことがうかがえる。

表 4　『球陽』外巻（1745 年）　　「御嶽名」は筆者

『遺老説伝』宮古関係		
名　称		御　嶽
＜巻之一＞		
37	豊見氏親大鯖を斃すこと	比屋地
38	悪婦誤って實子を池に投ずること	通り池
39	登佐の妻節を全ふすること	
40	鹽川邑に霊石飛来のこと	塩川
41	嶺間按司神舞を傳ふること	
42	仲筋村平屋西諸神を崇信すること	運城・泊
59	生兒の顔に鍋台を點ずる由来	
60	宮古島神出現し賞罰を行ふこと	尻間
61	禰間の伊嘉利龍宮界に遊ぶこと	外間
62	川滿邑神女神人を生むこと	目利真
63	佐禰大翁神女と夫婦となること	上比屋
64	宮古山兼久父の仇を報ずること	
65	比計樽世を厭ひ稷神を祀らるること	平屋久
＜巻之二＞		
69	宮古島戀角の神のこと	漲水
70	興那覇勢頭中山に入貢のこと	広瀬御嶽
71	宮古島仲間嶽の由来	仲間
72	隅屋里兼久世主の子鐵鋼を齎すこと	
73	友利村に神女漁夫の妻となること	山立
75	真種神女の明珠を守ること	喜佐真
76	伊良部邑玉美嘉神と化すること	乗瀬
77	伊良部豊見親大鯖を斃すこと	比屋地
78	多良間遠會呂神に護らるること	運城・泊
79	多良間島神那間の霊石のこと	瓦瀬（塩川）
91	宮古目黒盛家を興すこと	
＜附巻＞		
135	水納島に日本人飼鷹に會すること	

球陽外巻遺老説伝　島袋盛敏　昭和 10 年　学芸社

5. 宮古神話の特徴と世界像

(1) 宇宙（島）・人間・文化

宮古の旧記類などに紹介されている説話のうち、神話と位置づけた方がふさわしいと思われるものを表5にまとめた。神話の定義でも触れたように、神話には宇宙・人類・文化など3つの起源を語るもの、英雄神など神々の話などが該当する。これから神話群を分類、整理し、その特徴などを見ていきたい。なお、単一の領域のもの、複数の領域にまたがるものがあり、単純ではない。

第1に、宇宙（島）の起源についてである。1、4、7、11、14、15、17が該当する。

1は、天岩戸の端を折って海中に投げると固まって島形ができた。4、7は、津波で村が滅んだ。11は、赤牛の神が勝負に負けて死んだので与那国へ渡った。14は、島が流れて来間に停止した。15は、月と太陽は夫婦であったが光をめぐって対立、月光が弱くなった。17は、万古山を中背に、島の頭、尾と宮古島を形造った。また平井村を造ったが絶滅、八重山へ移る。

第2に、人類(人間)の起源についてである。2、3、4、6、7，16が該当する。2はクイツヌの化身と娘の人蛇婚による3人の子供が誕生する。4は、前項の宇宙起源と重複しているが、あまり村でヤマトの男と女から子孫が始まる。口碑もあって女と犬との婚姻の痕跡がある。6と7は、兄妹始祖が語られている。（7は重複）。16は、人間の死の由来を語っており、これも人類の起源の一種である。

なお、1の「島始」は多くの要素が重複しており、原夫婦天下り、子供の誕生、さらに土中から始祖、天人と土中の人が婚姻、村立てする。いくつかの話が複合したものであろう。

第3に、文化の起源についてである。12と13が該当する。12は、ヤーマスウガンの由来であるが、祭を怠っていたため鬼が村人を喰っていたが人々はそのことを反省し祭が復興する。13は、八重山のおもと嶽の大神に拉致されたまつみがだが、その恋いを得られない、帰りにまつみがは水死するが、そこから大樹が生えてその樹を切って舟を造ったというもの。

第4に、神々や英雄神の起源についてである。8、9が該当する。

8は、クイツヌと共に天降りした盛加神だが、そのうち島内で鬼共が暴れたのでこれを退治し平和な島をつくった英雄神として扱われている。9は、卵生伝説で島の創世を語るとともに宮古各地(アツママー御嶽、赤崎御嶽、ビマル御嶽など)の神々を産んだ壮大な神話である。

ところで、5、10は竜宮や冥界を訪問し帰ってくるとされた異郷訪問の神話である。分類しがたいので、第5その他とした。5は、エイ女房に招かれ富裕になる竜宮伝説およびんなふかという物忌みによって大世積綾舟がもたらされる。10は、継子いじめによって根入りゃ（あの世）に突き落とされ、神の定めにより現世へ送り返される。

(2) 世界像のかたち

表5の神話群を世界像として把えてみたい。世界像とは、「人間が現実に対して持ってい

表5　宮古の神話（抄）

神　話	出　典	概　要
1　島始	御嶽由来記	クイツヌ、クイタマの創生神が天の岩戸の石を投げ下ろして島をつくり、天下りして宮古島を創造する。
2　漲水御嶽弁財天女	〃	住屋の娘が夢枕に表れた若い男によって妊娠したが、それはクイツヌの化身である蛇だったが、3人の子を生み蛇は昇天した。
3　大城御嶽由来	〃	太陽の子の女神が島尻に天下りし、水を求めて大城山に住むようになり、ある日妊娠したが、蛇の子であった。
4　嶺間御嶽由来	〃	あまり村は津波に流され、あまり大ツカサ一人で住んでいたが、やまと人が来て一緒になり、村が始まった。（口承に犬と女の婚姻あり）
5　んなふか物忌の由来	〃	竜宮へ招かれたマサリャが壷をもらって帰ると裕福になったが、その秘密をもらしたため白鳥となって宮国のスカプヤ御嶽にいき、それからんなふか祭りが始まった。
6　来間島立始りのはなし	宮古島記事	戦乱をのがれて川満から兄妹が来間に来て、村立てをした。
7　多良間島立始めし事	〃	兄妹が畠仕事をしていたが、津波で全て流され、2人だけ残ったので村の始祖となった。
8　盛加神	宮古史伝	天下りした盛加神は、武勇をふるって鬼共を取り締まって平和な島をつくった。
9　大主御嶽由来	〃	池間島で貧しい女が12個の卵を産み、それから子が生まれ、宮古の各地の御嶽に祀られた。
10　住屋御嶽の由来	〃	継母に突き落とされた男の子供が、根入リャ（あの世）の国の神に、正しい心を持った君の来る所ではないと現世に送り帰された。そして天、地、根入リャの神の心に添って生きよと言われる。
11　女護が島の話	宮古島庶民史	女だけの村に怪力のカタイラマーガが来て、村の守り神の赤牛と対決したが赤牛が負けて死んだので、女たちは与那国へ逃げた。
12　おもと嶽大神の恋	〃	美しい池間のまつさびに八重山のおもと嶽の大神が恋をしたが得られず、拉致されたまつさびは水死、その体から大樹が生え船をつくった。
13　やーますぶなかの由来	〃	パーントゥ（鬼）が島の人々を食っていたが、与那覇村の三人兄弟が来て鬼を退治したが、鬼はまつりを止めたのでそうしたという。それからまつりは復活した。
14　おうがまの霊石	〃	おうがまが織物をしている時、島が流れていくので、母が止めるよう命じたが、気づかなかったので、島は来間島まで流れ止まった。
15　太陽と月の話	月と不死	太古、月の光（妻）は日の光（夫）より明るく、夫は嫉妬して妻を地上に突き落として、それ以来月の光が弱くなった。
16　アカリャニザガマの話	〃	天と月の神が人間に長寿をとアカリャニザを使いに送ったが、蛇が先に若水を浴び、残った死水を飲んだ人間は死ぬ運命になった。
17　万古山御嶽道明け縁起	宮古島の信仰と祭祀	天から子と、孫の夫婦が天下りし中骨、頭、尾と島造りをした。村は繁盛していたが、ある日の十五夜の時、豚肉を供えたということで神が怒り、ヤドカリで村人を攻め、村人は八重山へ逃げた。

る基本的なものの見方あるいは態度が、具体的な神話や儀礼などにおいて表現されているもの」(注4)と定めたい。

神話などの世界像は、人間の初期の頃や原古の一回きりの時期のことを指しているので、原始的な採集狩（漁）猟とそれに続く農業放牧の時代が浮かび上がってくる。

まず、採集狩（漁）猟を基本とする社会では、動物や魚介類などが身近な存在となり、自然そのものの中で、人間と動物は対等な関係にあった。地球によっては神と崇める所もあった。そう見てくると、神話群の中では、表5の中で2、3、4、10、11、14などが浮上する。宮古の神話に出てくる代表的な動物は、蛇と赤牛である。犬も登場する。とくに、蛇と赤牛はともに神の化神として登場し、悪魔的な要素も一部見られるが、一種の集団の先祖などと崇拝されるトーテム的な存在を思わせる。蛇の話は、漲水御嶽や大城御嶽の由来としてよく知られているから省略して、赤牛のことに若干触れたい。赤牛は、まず来間では鬼のように島人とを喰うという恐ろしい存在でもあるが、その心は先祖が続けてきた重要な祭りを怠っているからに他ならず、島人の心を体現している存在ともいえる。一方、10の継子いじめで根入りゃ（あの世）に突き落とされた少年を裁く根の国の神が、心根が良ければ赤牛がなつくであろうと唱え、赤牛がなついたのでこの世に少年を送り返す。11の神話では女たちの村で赤牛が守り神として祀られている。赤牛はここでも、心根の指標として位置づけられている。

次の世界像は、農業放牧という大きな生活の革命を経た社会であり、定住などにより自然のもつ意味も変わってくる。自然と人間は一体でなく、自然は1つの対象となる。そして、主人公も動物から植物や人間へ変化する。動物は人間との対等な関係から次第に遠ざけられ、低下していき、植物などが重要で身近な目標となる。

1と8と12を見てみたい。1の「島始」の所で途中、土中から木荘神と草荘神が出てくるが、これは明らかに植物が中心である。また、8の盛加神は乱世を取締る神だが、クバの葉に包んで鬼兵を追いやった後クバを枯らすと世が乱れるであろうとの、警告を発している。12には、水死したまつさびの体から大樹が生えその樹を切って舟を造ったという話がある。一種のハイヌウェレ型神話(注5)といえよう。死体から米や粟などさまざまな穀物や食料などが生えてくるという型が一般的だが、それで舟を造ったというのが独特である。

採集漁撈や農業牧畜という区分けは、原理的な分け方であり、宮古島のような地域では時期区分ができず、一筋縄ではいかない面もあろう。

植物や穀物については、穀物を神から盗んでもってくるという説話が各地に見られるが、これをプロメテウス型神話(注6)と呼んでいる。ただ宮古では、昔話として上比屋御嶽についての類似する話がある(注7)。

次に、これらの世界像の他に、いくつかの特徴を持つ神話がある。4と6は一度津波に襲われて廃村となり再生する話である。ここには挙げていないが、6の来間島のはじまりの話でも、『宮古史伝』では津波で無人になった後兄妹が島始めをしたという異伝を伝えている。

また、民間説話として挙っている大神島では津波ではないが、海賊に襲われて焼かれた後兄妹が新しく島建てをしている(注8)。このように洪水や侵略によって島人が絶滅した後、兄妹が始祖となって再生していく話が多いのが目立つ。とくに小島の島建てはほとんどそうであり、さらに掘り下げて考察する必要がある。

16の「アカリザガマの話」は、ネフスキーが慶世村から聞き、『民族』という全国的に知られる研究誌で紹介した神話である。前掲の『世界神話辞典』でも紹介されるなど、よく知られている。ところで、これは人間が死ぬようになった起源を語るもので、人間と蛇が競争し人間が負けたため、蛇は生き永らえ人間は死ぬ運命になった。これについては他の断片的な異文や昔話にも伝わっており、初めは人間が勝っていたという話がうかがえる。これには、宮古における重要な水の話がサブテーマともなっていて、水には若水(ばかみず)という“不死”の水と死水(しにみず)があり、そこに蛇のモチーフが重なってくる。これには漲水御嶽、大城御嶽の起源を語る蛇と水にも現れている。蛇が始祖神の化身であるとするなら、人間が負けるのが通常のあり方として肯ける。ここでは、死と再生の循環が、水と人間と蛇を通して克明に語られている。

10の「住屋御嶽」の根入りゃの国へ行き帰ってくる話の中で、その根入りゃの国の神が子供を送る時「あから世(現世)に帰り行きて、天プトゥク・地プトク・根入りゃプトクの主司(ぬすつかさ)となれ」という言葉がある。プトクとは「解く」という意味である。ここで、宮古における宇宙像のようなものの輪郭が描かれている。

天・地・地下の三層構造は、神々の世界、人間の現世(ミャーク)、死者が往く根入りゃ国であり、神話で語られているところが興味深い。また、與那覇勢頭豊見親のニーリにも、類似した根入りゃへ行き地下の裁きを受けて現世に戻った話があり、一つの異伝であろう。住屋の近くには同豊見親の住居跡という口碑もある。

最後に、万古山御嶽についての島建ての神話をとりあげる。この神話も宇宙・人類の起源を示す重要な内容のもので、漲水御嶽と並ぶ壮大な天下り神話である。興味深いのは世界が一度終末を迎えたというもので、洪水と違って人間の浅薄な行為によるれっきとした理由のある破滅であった。

この神話は、神主が神と共に3ヶ月以上毎朝欠かさず宮古島づくりをするという、壮絶な行為によって御嶽由来が造られていくそのプロセスをダイナミックに示していて貴重なものである。他の御嶽由来もこのように造られ伝承されてきたものと考えられる。

(3) 宮古(琉球)の神話領域

大林大良は、1972年に発表した論文『琉球神話と周囲諸民族神話との比較』の中で、神話領域を表6の通り作成した。これは、琉球神話の資料を整理し、それを奄美、沖縄本島、宮古、八重山ごとに、12の神話モチーフを当てながら分析した研究成果である。さらに大林は、琉球神話を主体に、それぞれのモチーフで東アジア、東南アジアなどの周囲諸国の神話と比較研究した結果も述べている。

表6　琉球の神話領域（＋は存在する）

	原夫婦天降	天よるか島ら島の造土砂に	流れ島	風により孕む	粘土から人間製造	兄妹始祖	始祖渡海・漂着	生み損ない	犬祖	地中より始祖	天地分裂巨人	楽園状態
奄　美	＋		＋	＋	＋	＋					＋	
沖縄本島	＋	＋	＋	＋		＋	＋	痕跡			＋	＋
宮　古	＋	＋				＋	＋	＋	＋	＋		
八重山		＋				＋	＋	＋	＋	＋		

大林『琉球神話と周囲諸民族との比較』1972年

前者の神話領域では、琉球に12の神話モチーフがあり、そのモチーフが北部（奄美・沖縄本島）と南部（宮古・八重山）に分かれる傾向がある、としている。具体的には、北部では、流れ島、風による孕む、世界分離巨人など、南部では、犬祖、地中より始祖などが報告されている。また、兄妹始祖神話は、琉球列島に普遍的である、としている。

後者の、周囲諸国との比較研究による琉球神話の系統のうち、必要最小限に宮古にひきつけ拾い上げてみる。①琉球の神話は単一の起源ではなく、さまざま系統のものがある。（それらは体系にまとめられておらず、琉球王朝神話も列島全体を制覇していない。）

②主として南部に分布する兄妹始祖神話と生み損い神話は、ともに中国華南から東南アジアの兄妹始祖洪水神話と関連している。ただし普通の形式ではなく、特殊である。これは、「土中から始祖」より新しく、インドネシア的要素もあるかも知れない。

これらをまとめて大林は、「南北二地域に分かれ、北部神話は、一方ではインドネシアやポリネシアと、他方では日本内地と関係をもつが、直接・間接に中国の東南海岸からきた諸要素からなり、南部神話は古層栽培文化とある種の漁民文化から成り立っており、しかも王朝神話の影響がその上に及んで重なっている。」と仮説的な要約を試みている。

また、大林は「琉球王朝神話」を中心とする神話については、「基本的なモチーフ・構造においては本土の記紀神話と大幅に一致するが、細部は一致しない。そのことは、古典神話が今ある記紀にまとめられてから琉球に二次的に伝播したというより、記紀にまとめられる前の共通の母胎から分かれて、琉球において保存された可能性の大きいことを示唆している」と述べている。

宮古そして琉球・沖縄の神話研究における基本的枠組み及び方向性が、示されている。そのことを踏まえ、これから復帰後における研究成果なども含めて具体的に取り組んでいくことが求められていると言える。

ところで、先の琉球神話の領域で宮古に関しては、12 項目 7 つを挙げているが、「流れ島」「風により孕む」は『宮古島庶民史』に示されており、追加される必要がある。また、「楽園状態」についての痕跡も、『宮古史伝』の大主御嶽の由来に見ることができる。こうした点からも、研究を深めその枠組を広げていくことが課題である。

6. 結びにかえて

宮古の説話をできるだけ拾い集め、その中から神話・伝説などと思われるものを分類し、その概要と世界像などをまとめてみた。

現在、日本国内においては、日本神話をはじめ東アジア、東南アジア、いや世界規模で研究が進められてきている。日本神話の系統として、神話素の多くは、日本古代文化と同様に海外の隣接地域から伝来したという (注 9)。

先の大林の指摘とも合わせて考えると、琉球の神話の系統も同様な傾向にあるといえるかも知れない。そうした大枠な見通しの中で、宮古の神話、そして宮古の先祖が考え創り上げてきた伝説をはじめ儀礼やその他の表現形式などを追求することを通して、その精神史を掘下げていく一つの糸口としていきたい。

大林は、「神話における真実とは、歴史的事実でもなければ科学的真理でもない。それは神話的真実である。（中略）神話の研究は神話自体から研究することも可能だが、同時に神話も文化の一部であり、（中略）それが伝えられた文化や社会の刻印が示されている。」と述べている (注 10)。

神話的真実とは、人間が死の恐怖を死の起源神話を作って（アカリャニザガマの話）乗り越えてきたように、合理的精神だけではなく、無意識の思考も考慮して人間そのものの多様性を追求していく必要があろう。

（注）

1　松村　一男　角川書店、1999 年

2　大林 太良・伊藤 清司・吉田 敦彦・松村 一男編
　『世界神話辞典』角川選書、2005 年

3　大林 太良　『神話学入門』中央新書、1966 年

4　前掲 3

5　インドネシアのセラム島ヴェマレ族に伝わる。ハイヌヴェレとはココヤシの枝の意。人間の死体や生きた体内から栽培植物が生まれるという神話。前掲 3

6　ギリシャ神話で、ゼウスから火を盗み、人間にもたらしたが雷神の怒りをかった。これにちなんで、天神などから穀物の種など盗む神話。前掲 3

7　福田 晃・岩瀬 博・遠藤 庄治編
「穀物の始まり」『沖縄の昔話』日本放送協会、1980 年

8　谷川　健一　『埋もれた日本地図』1972 年

9　伊藤　清司　「日本の神話」『世界神話辞典』角川選書、2005 年

10　前掲 3